

郷土を知り、郷土を愛する

志木市 歴史とんぼ

—— 執筆・協力 志木のまち案内人の会 ——

第47回 日比谷図書館の蔵書疎開と志木

太平洋戦争末期、貴重な文化財が散逸・焼失することを防ぐため、所蔵物の疎開が計画され、東京をはじめ地方都市部の多くの図書館では貴重本を中心に疎開が実施されました。志木市内(当時は「志紀町」)でも日比谷図書館の蔵書が疎開しています。

昭和19年末～20年初、当時の日比谷図書館長・中田邦造氏が主導して40万冊を疎開させました。その中には既存の図書館蔵書だけでなく、急遽、図書館が個人所有の貴重本などを買い上げたものも含まれています。

日比谷図書館の疎開先は、北足立郡志紀町(現・志木市)の西川家倉庫や西多摩郡多西村(現・あきる野市)の村長宅・寺院など比較的小規模な場所(8か所)に分散されました。これ

らの場所への運搬には、トラックのほか、交通事情が悪化するなかでは大八車やリュックサックなど人力に負うところも多く、旧制中学生などがその役割を担っていました。

昭和19年4月、西川武吉郎氏(現当主・西川和人氏の祖父)は日比谷図書館と倉庫賃借契約をし、図書館から「土蔵管理事務」の嘱託を受けました。西川家倉庫には図書館の蔵書や買上本など約10万冊が保管され焼失を免れたものの、都内の日比谷図書館は空襲により全焼し、蔵書20万冊余りが失われました。

戦後、米軍進駐軍により西川家の疎開蔵書が一時接收されましたが、西川家の疎開蔵書の中には、旧満州国関連の図書・資料があり、調査のために接收されたと考えられています。接收された図書は後日、米軍から日比谷図書館に返却され、京橋図書館の地下倉庫に一時保管されていましたが、昭和24年の台風により地下倉庫が浸水し、一部の疎開図書が被害を受け廃棄するという道を辿っています(西川家倉庫は非公開です)。

(参考図書：金高鎌二著『疎開した40万冊の図書』、読売新聞(令和3年3月28日付))



▲西川家倉庫



健康に熱いまち、志木市

8月7日は「立秋」ですが、まだまだ夏真っ盛りの日々が続きます。夏は厳しい暑さにばかり目が行きがちですが、日が長く、エネルギーが溢れる季節でもあります。塩分・水分補給、バランスの良い食事、十分な睡眠をしっかり取り、健康に気をつけながら、エネルギーに夏を楽しんでいきましょう。

さて、本市では皆さんがいつまでも元気に健康でいていただけるようさまざまな取組を実施していますが、なかでも、歩いたり、健診を受けたりするなどの健康づくりにつながる活動がポイントとなる、本市独自の「いろは健康ポイント事業」については、対象年齢である40歳以上の市民のうち13人に1人が参加しており、運動習慣が身につくことはもちろん、医療費削減にも大きな役割を果たしています。具体的な数字としては、年間あたり1人約7万円の削減につながっている実績があり、いつまでも元気でいていただけることは、医療費のみならず介護費用の抑制にもつながります。

このようなことから、今年度は「いろは健康ポイント

事業」のさらなる充実を図るため、仲の良い参加者同士でグループを組み、グループ内での順位やグループ対抗のランキングを確認できる機能を加えることで、これまで以上に楽しんで健康づくりに取り組んでもらえるためのパワーアップを行います。現在、新規の参加者を8月23日まで募集していますので、ご興味のある方は是非ご応募ください。

また、さらなる健康づくりに向け、6月末の「いろは健康ポイント事業」計測会では、歯や口腔の機能が衰えている状態である「オーラルフレイル」を予防するための新たな取組として、咀嚼・嚥下機能に必要な舌の力を計測する舌圧測定を実施しました。「噛む」「飲み込む」「話す」などの口腔機能の低下は、食欲の低下による低栄養や、人とのコミュニケーションが億劫になるなど、心身にさまざまな影響がありますが、「オーラルフレイル」は早い段階から意識することで予防や改善につながります。運動習慣が身に付く健康ポイント事業とあわせて、いつまでも自分の歯でおいしく食べ、家族や仲間と話す楽しみを保つため、志木市は歯と口腔の機能低下を防ぐ「オーラルフレイル対策」にもしっかりと取り組み、健康づくりを応援していきます。

市民の皆さんの日頃の健康づくり活動の成果により、令和6年度も埼玉県の「健康長寿優秀市町村表彰」において、優良賞を受賞し、平成28年度からの連続受賞となりました。皆さんの日頃の健康づくり活動に対して敬意を表しつつ、改めて「あなたの元気が志木市の元気」という思いを持ちながら、夏の暑さにも負けない熱さでこれからもまちづくりを進めていきます。